KAYASHIMA, I.— On the Watase's line viewed from the
distribution of Spiders

渡瀬線を蜘蛛により考察する

萱 嶋 泉

は し が き

予て筆者は渡瀬線の意義を蜘蛛によつて考えてみたいと思つていた。ところがはからずも昨年度より本庄高等学校の石野田辰夫氏の協力を得て、此の方面の蜘蛛の研究をする様になつた。そこで昨年度に於ては、7月30日より8月6日の8日間、鹿児島、種子ケ島、屋久島等に、今年度に於ては7月29日より8月4日の7日間、奄美大島とその周辺の島々に採集に行く事が出来た。

採集した標本に就いては整理のつき次才石野田氏と共に目録を編んで、発表することになっている。

今回は分布上特にはつきりしている蜘蛛を選んで、これを基礎に渡瀬線を考えてみたいと思う。採集が短期日である故に標本も不充分であるから、考察を進める上に適確さを欠く恐れがあることゝ思うが、現在筆者の考えている所を記述させて戴き、大方諸賢の心からなる御叱正を賜り今後更に蜘蛛全般に亘つて、此の問題を研究する時の良き資料にさせて戴きたいと思う。

本稿を草するに当り、蜘蛛に関して、岸田久吉先生、八木沼健夫氏、山口鉄男氏、石野田辰夫氏、渡瀬線に関しては、岡田弥一郎氏、木場一夫氏等に多大の御教示と御援助とを賜つた。故に茲に明記して深甚の謝意を表する次第である。

考 察

生物の自然分布は、その土地の地質構造と密接な関係のあることは、既に周知のことである。

渡瀬線に就いても、その南、北に位する諸島の地質学的な成因に関しては、多くの専門学者が述べている如く、誠に複雑なものであつて、定説は仲々つかめない。然し小藤文次郎博士¹⁾や早坂一郎博士²⁾の説の如く、屋久島、奄美大島、沖縄本島北半、慶良間群島、石垣島、西表島等は太古界に於ては大隅、薩摩の山々と一連の山つゞきであつたとのことである。それ故に現在の島々は、その当時の山頂であつたと云はれている。此の如き現象は長い歳月の間に行はれたもので、各島の成因にもかなりの年代の隔りがあ

1) 小藤文次郎：地質学雑誌 第5巻 第49号 1897年

2) 早坂 一郎：日本地史の研究。内田老鶴園 1927年

るのである。中でも屋久島と奄美大島の間の沈降は、最も初期に行われたものと考えられているが、このことは生物の分布の上に大きな影響を与えているのは事実である。

即ち陸棲哺乳類で渡瀬庄三郎氏³⁾、鳥類で黒田長礼氏⁴⁾、哺乳類で青木文一郎氏⁵⁾、蛇類で牧茂一郎氏⁶⁾、両棲の無尾類で岡田弥一郎氏⁷⁾、有尾類で佐藤井岐雄氏⁸⁾、鼠で徳田御稔氏⁹⁾等が此の両島の間に東洋区と旧北区の境界を引くべきだと申している。岡田弥一郎氏はこの境界線を渡瀬線と呼ぶべく提唱されたのである。

さて蜘蛛に於ては先づ *Heptathela Kimurai* (KISHIDA) キムラグモから考えるに、白甲鑑氏¹⁰⁾はキムラグモの南限は渡瀬線より南の沖縄諸島と先島列島との間ではなかろうかと述べて居られる。この線に蜂須賀線と命名して、このクモに関しては渡瀬線より蜂須賀線の重要であることを認めている。此のことは坂口総一郎氏が沖縄で採集したキムラグモを岸田先生へ送つた記録によつて沖縄本島に産するものとして書かれたものと思うのである。然し筆者はキムラグモは渡瀬線が南限ではなかろうかと思つている。それは南九州や種子島、屋久島に於ては、棲息していそうだと思う所を捜せば必ず見付けることが出来るのである。特に南九州に於ては個体数が多いので困難を感じない。けれども種子ヶ島、屋久島へ行くと個体数が少いので困難を感じる。所が奄美大島になると此の様な環境ならば棲息していなければならぬと思われる場所をいくら捜しても、どうしても採集することが出来なかつた。徳之島、沖之永良部島に於ても同様なことが云えるのである。

前にも述べた如く一度採集されたこともあり、未だ筆者は沖縄本島へ採集に行つていないので、これ以上の事は申されぬと思うけれども、現在の気持ではキムラグモも渡瀬線で区劃される様な気持がするのである。

次に *Kishinouyeus typicus* KISHIDA キシノウエタテグモに就いては南九州でもかなり採集が出来るクモであるが、種子ヶ島、屋久島へ行くと全然みあたらない。奄美群島に於ても同様であつて、このクモに関しては南限が三宅線により区劃されていると思われる。

Latouchia japonica STRAND ミヤコシマトタテグモでは南九州に於ては未だ採集されたことがない。然し種子ヶ島、屋久島に行くと、かなり多く棲息している。奄美大島では極く普通のクモである。それで此のクモの分布境界線は前種と同じく三宅線ではなかろうかと思うのである。(但し北限)

3) Watase, s.: Annot. Zool. Jap. Vol. 8, 1912.

4) 黒田 長禮：日本鳥類の分布に就いて 地学雑誌 37巻 437号 1925年.

5) 青木文一郎：本邦に於ける哺乳動物の分布状況 動物学雑誌 24巻 1913年.

6) 牧 茂一郎：日本蛇類図譜 第1書房 1931年.

7) 岡田彌一郎：日本産蛙總説 岩波書店 1930年.

8) 佐藤井岐雄：日本産有尾類總説 日本出版社 1943年.

9) 徳田 御稔：日本生物地理 古今書院 1941年.

10) 白 甲 鑑：キムラグモの分布に就いて 蜘蛛学雑誌 13巻 2号 1953年.

Latouchia sp. ナセトトタテグモ (仮称) 此のクモは奄美大島の住用の山地で採集したものである。名瀬市附近にも多数棲息していた。それでこのクモは渡瀬線以南のものではないかと思う。

Euagrus formosanus SAITO タイワンジョウグモ このクモは奄美群島では広く分布して居る。個体数もかなり多いが、台湾の如くではない。今迄に南九州で一生懸命に捜して居た此の *Dipluridae* ジョウグモ科は屋久島、種子ケ島でも遂に発見出来なかつた。此のクモは明らかに渡瀬線以南のクモであることが云えると思う。(此のクモは更に研究することにより或いは *Euagrus formosanus* とは別なものになるかも知れない。)

Calommata signata KARSCH ワスレナグモ これは南九州でも採集出来るけれども稀である。種子ケ島、屋久島、奄美大島等からは未だ採集されて居ない。筆者も台湾に於て10年余りの間大いに捜したが発見出来なかつた。然し Pocock¹¹⁾ 氏は *Calommata truculentum* をビルマから報告しているからこの属に就いては、今後更にこれらの地方で注意をせねばならない。今の所では此の種の南限は三宅線により区劃されていると思う。

Filistata sp. アマミカヤシマグモ (仮称) 台湾からは *Filistata marginata* KISHIDA が採集されているが、奄美大島には別種の *Filistata* sp. が棲息している。このクモは屋久島、種子ケ島、九州本土にも見あたらない。はつきりと渡瀬線以南のものであると思う。奄美大島に於てはこのクモは極く普通のものである。

Nephila maculata (FABRICIUS) マダラチヨロウグモ 筆者はこれまでに屋久島以北では採集した事がない。然し奄美大島に行くと実に多く棲息している。大形のクモであるから目立つものである。奄美大島を旅行しているといたる所で丸網の大きな巣の中央にこのクモが8本の歩脚を拡げて占座しているのを見かける。此のものは明らかに渡瀬線以南のクモであると思う。

Argiope aemula (WALCKENAER) ナガマルコガネグモ 此のクモは既に山口鉄男氏が奄美大島に棲息していることを報じて居られる。筆者も今回の採集で多数の標本を得た。沖之永良部島にても採集することが出来た。矢張り渡瀬線以南のクモであると思う。

以上記述した蜘蛛を表にすると次の如くなる。

11) R. I. Pocock; The Fauna of British India, and Burma. 1900.

蜘蛛類	Kyushu	Miyake's line	Tanega- shima Yakushima	Watase's line	Amami Islands
I. Liphistiidae キムラゲモ科					
1. <i>Heptathela kimurai</i> (KISHIDA) キムラゲモ	+		+		—
II. Ctenizidae トタテゲモ科					
2. <i>Kishinouyeus typicus</i> KISHIDA キシノウエトタテゲモ	+		—		—
3. <i>Latouchia japonica</i> STRAND ミマコジマトタテゲモ	—		+		+
4. <i>Latsuchia</i> sp. ナセトタテゲモ (假称)	—		—		+
III. Dipluridae ジョウゴゲモ科					
5. <i>Euagrus formosanus</i> SAITO タイウンジョウゴゲモ	—		—		+
IV. Atrypidae アゲモ科					
6. <i>Colommata signata</i> KARSCH ワスレナゲモ	+		—		—
V. Filistatidae カヤシマゲモ科					
7. <i>Filistata</i> sp. アミカヤシマゲモ (假称)	—		—		+
VI. Argiopidae コガネゲモ科					
8. <i>Nephila maculata</i> (FABRICIUS) マダラヂョロウゲモ	—		—		+
9. <i>Argiope aemula</i> (WALCKENAER) ナガマルコガネゲモ	—		—		+

会 告

昭和29年4月本部が大阪に移されてからの活動状況

29. 4. 1 東亜蜘蛛学会事務所を東京より大阪に移す
 29. 4. 10 ATYPUS No.6 発行
 29. 7. 30 ACTA ARACHNOLOGICA Vol. XIII, NOS. 3/4 発行
 (旧本部より)
 29. 9. 10 ATYPUS No. 7 発行
 29. 10. 17 動物学会大会出席者中の本会会員, 懇親会, 総会,
 編集会議
 30. 1. 1 ACTA ARACHNOLOGICA Vol. XIV, No. 1 発行